

パレスチナ人に「生きる権利」を

2021年05月24日

イスラエルとパレスチナのイスラム主義組織ハマスとの間で、21日、停戦が成立した。何より嬉しいニュースである。停戦と言うと、戦争状態であったみたいだが、両者は子どもと大人の争いのようで、対等な戦力ではない。ガザからロケット弾が発射されるが、大半は目的地に届かず、途中で迎撃されている。イスラエルの空爆は狙った所を間違いなく直撃している。死者は、ガザで子どもを含む232人、抗議活動が広がったヨルダン川西岸で治安部隊との衝突で20人以上、イスラエル側は12人である。20対1の割合である。イスラエル側は「自衛のための攻撃」と言うが、パレスチナ人の「生きる権利」は無視されている。そして、今回の衝突は、エルサレムのアルアクサ・モスクをイスラエル治安部隊が再三襲撃し、数百人が負傷したこと、また、イスラエルが東エルサエムの住民に強制立ち退き要求をしたことに対し、ハマスがロケット攻撃をしたというのが正しく、イスラエル側が仕掛けた訳である。国連では停戦を呼びかけたいが、米国の反対にあって、出せないでいた。今の世界は、どの国においても、どの社会においても、力（権力、軍事力、警察力、経済力、情報力）のある者は好き勝手なことができるのかと叫びたくなる。

私はイスラエル旅行に行ったことがある。その時は、アラファト、ラビン両首脳の時代で、最も安定した時代であった。パレスチナ人教会を訪ねたいと旅行会社に希望を出し、ベツレヘムのルーテル教会を訪問する機会を得た。イスラエル人の居住区は整備されているが、パレスチナ人の居住区の道路事情は極めて悪く、信号も十分にはなかった。ミトリ・ラヘブ牧師から短い時間であったが、二千年来、キリスト教を担って来たと自信に満ちた話を聞いた。彼は『私はパレスチナ人クリスチャン』を著し、来日した。新宿のルーテル教会で講演会があり、聞きに行き再会し、本にサインしてもらった。

妻がイスラエル旅行の折に、友人となった人と交流を続けている。彼女は「ピース・ボート」に幾度か乗り、旅行記も書いている。彼女から「ピース・ボート」が「空爆下のガザの声 パレスチナはいま」をユーチューブで放映するから観てとの連絡が来て、私も観た。私は、問題が起こった場所に自分の身を置いた場合、どう思うかを想像してみる。ガザにだけは身を置きたくない。青空は見えるけれども、監獄に閉じ込められた状態で、何より将来に対する希望が持てないことが耐えられない。ただ生きて、イスラエルからの攻撃におびえるだけである。ガザで家屋を崩壊されたザヘリさんの証言があった。残酷この上ない。東エルサレムに住むラミさんは必死で訴えていた。国際法や人権法に基づいて、国際社会に正義を訴えるが、全く無視されて、期待できない。しかし、世界の人々にパレスチナの現状を知ってもらいたい。パレスチナの現状をユーチューブで伝える「ピース・ボート」の企画に感謝している。イスラム諸国に軍隊を送り、何百万人も殺害した米国こそがテロリストである、と。そして、パレスチナと深い関わりを持つ高橋真樹氏が、イスラエルとパレスチナの歴史を解説された。歴史の正しい認識が両国のあり方を正していくのではないか。ユダヤ人は、ヨーロッパで疎まれ、差別された。ナチズムのユダヤ人大量虐殺は許されない。しかし、虐殺を経験したイスラエルが同じ虐殺をパレスチナ人にすることは認められない。また、イスラム世界に詳しい高橋和夫氏の解説に納得した。汚職の疑惑が持たれているネタニヤフ首相が強硬路線を見せることで、権力維持を図った攻撃であった。今回の停戦はエジプトが仲介したが、米国の力が大きく働いた。米国議会と世論がバイデン大統領に停戦に向かわせた。ユダヤ人口ビーは、かつてほどの影響力はなくなっている、と。米国のイスラエルへの無批判な援助体制が変わることを期待する。